

英米文学鳥類考：カラスについて

梶田 隆宏

(人文学部人文学科欧米文化コース)

A Study of Birds in English and American Literature : Raven

Takahiro MASUDA

(*Western Cultures*)

カラス

(1)

鳥がその種によって明暗対照的なイメージやシンボルを有することは珍しくもないが、カラスはフクロウと同様に「不吉な鳥」であると同時に、古近東西様々な神々と係わってきた「聖鳥」でもある。カラス科に属する鳥は103種もある。それらを「大別するとカラス類とカケス類に分けることができる」¹⁾が、そのカラス類に属する代表的な鳥を挙げてみても、ホシガラス、ミヤマガラス、ワタリガラス、ハシボソガラス、ハシブトガラス、コクマルガラスなどがある。

とはいえ、フリースの『イメージ・シンボル事典』によれば、「鳥の中でも黒くて、予言能力があり、腐肉を食べる鳥すべて(とくにワタリガラス= raven)を総称して<カラス= crow>という」²⁾とあり、またカラス類の中で聖書に登場するのも raven のみなので、ここではワタリガラスを中心にカラス一般について述べてみたい。

ちなみに、ヨーロッパ世界でカラスが予言能力を持つ鳥として見なされてきたことは『イソップ寓話集』の「大鳥(ワタリガラス)は前兆によって人間たちに吉凶を示し、未来を予言する」³⁾という言葉や、『イメージ・シンボル事典』の「ワタリガラスが普段から住んでいる住み処を見捨てるようなときは、やがて飢餓と大量死が訪れると予期できる。これはワタリガラスがこうした惨禍を起こす原因であるサトゥルヌス Saturn の性格を帯びているため、この惑星のもたらす悪影響を非常に早くから事前に察知できるためである」⁴⁾という説明からも窺い知ることが出来よう。

一般にカラスと言えば、誰しも思い浮かべるのは、先ず第一に、喪服や闇の世界を連想させる全身漆黒の羽根の色としわがれた鳴き声であり、第二に、同じ大型の鳥ではあっても、孤高を貫く男性的な鷲などとは全く異なる薄気味悪い飛び方や不気味なほどに貪欲な(ravenous)雑食性の食餌である。したがって、洋の東西を問わず、カラスが「不吉を知らせる鳥。死の前兆となり、病気と不運をもたらすとされる鳥」⁵⁾であり、「夜の闇や死者の国の動物」⁶⁾として人々から忌み嫌われてきたのも無理はなからう。

とはいえ、カラスが吉凶あざなえる両義的な鳥として見なされてきたのは、この鳥には何よりも「人の想像力をかきたてる強烈な個性がある」からであろう。鳥の詩人にして博物学者のハドソンは「ワタリガラスは、ひとによって好き嫌いがあるとはいえ、鳥類中で最も心そそられる鳥である。人の想像力をかきたてる強烈な個性があるのだ。鳥にしては気味が悪いほど頭がよく、加えて残酷な精神と、深い人間に似た声もち、かつ極めて長命である。こうした特色が人々の心にさまざまな印象を与え、そのためにいろいろと奇妙な評判をえてきた。単なる鳥ではなく運命の使者である

とか、悪霊であるとか、ある偉大な死者が生前の土地へさまよい出てきた姿だとかである」⁷⁾と述べているが、この鳥についての更に詳しい解説を『朝日＝ラルース 世界動物百科 (鳥類)』で見てもみよう。

カラス科カラス属に属している。カラス科の鳥のなかでいちばん大きく、全長65センチ余り、両翼をひろげた長さ〔開張〕は1.3メートルで、体重は1,300グラムもある。ユーラシア大陸に住むスズメ目の鳥のなかでは最大の種である。

足や強大なくちばしまでも含めて、全身真っ黒で、羽毛は紫黒色の強い光沢をおびている……ワタリガラスはカラス科のなかでもっとも分布域の広い種である。ユーラシア大陸の大部分、北アフリカの全体、アラスカからメキシコまでにすんでいる。このような広い範囲にすんでいるにもかかわらず、ごく寒いときに近距離の移動をするくらいで、ほとんどの地方にいるものが留鳥なのである。

日本では北海道の利尻島、礼文島で少数のものが繁殖するといわれている……鳴き声は、おもに飛んでいるときに聞こえるが「クルッ」とか「コロッ」とかいった短い独特なものだ。しわがれていて、少し内にこもったような声である。

雑食性なのでなんでも食べるが、おもに動物性のものを好むようで、腐った肉などは大好物である。けものの死骸を見つけてもすれば、たちまち平らげてしまい、傷ついたり、死にかけている動物を襲ったりする……もっともはなはだしいのは、自分たちの仲間が死んだり、傷ついたり、仲間のひなが巣から落ちたりすると、すこしもためらわずに食べてしまう。

かつては戦場や刑場に現われて屍を食べるといって、気味の悪い役回りもしていた。そのため、多くの地方ではたいへん不吉な鳥となっているわけだが、アラビア人は、放っておけば困る死体を処理してくれる鳥と考えているので、決して殺さないという。

ワタリガラスは、ふつう生涯同じ雌雄でつがいになっている、といわれる……巣をつくる場所は、空からでなければ近づけないような、けわしい絶壁だが、適当な岩場があれば喬木の枝にかけることもある……巣はしばしば何年にもわたって繰り返し使われる……長寿で、69歳まで生きた例がある。⁸⁾

と見てくれば、庶民の間ではカラスが死を予知し「病氣と不運」をもたらす「不吉な鳥」として見なされてきたのも首肯できよう。子供の頃、私の故郷では、カラスが群れて鳴くと死人が出ると信じられていた。しかし、この俗信は和歌山県の片田舎だけのものではなく、どうやら西洋でも同じようである。事実、ジャン＝ポール・クレベールも「民間伝承の世界では、鳥は悪い知らせ、つまり死の知らせを運んでくる使者である。アイスランドでは今でも、鳥が屋根に留まると、その家の誰かが死ぬということが信じられている」⁹⁾と述べている。

「カラスが鳴くと人が死ぬ」という迷信の根拠について、實吉達郎は「おそらく縁起でもないあのガーアという声と、人の死体をカラスがむさぼり食うところから、カラスは人の死の近いのを知り、それを待ち通しがって鳴く、そこでカラスの鳴く声は人の死の前兆ということになってしまったのであろう」¹⁰⁾と分析している。では、そうした具体例を英米文学の世界で登場するカラスで見てもみよう。

(1) *Othello*: (4幕1場).

As doth the raven o'er the infected house,

Boding to all—¹¹⁾

(疫病に取りつかれると、かならず大鳥がやって来て、その家の軒先を離れず不吉を知らせて鳴き続ける、あたかもその声のように)¹²⁾

(2) *Macbeth*: (1幕5場).

The raven himself is hoarse
That croaks the fatal entrance of Duncan
Under my battlements.¹³⁾

(カラスの声までしわがれる、ダンカンが私の城へ運命の到来するのを告げようとして。)¹⁴⁾

(3) *The Raven* (12節) by Edgar Allan Poe

... Then, upon the velvet sinking, I betook myself to linking
Fancy unto fancy, thinking what this ominous bird of yore—
What this grim, ungainly, ghastly, gaunt, and ominous bird of yore
Meant in croaking 'Nevermore.'¹⁵⁾

(長椅子のビロードに身を沈め、さて想いの中に想いをつなぎ、かえりみた、この古の不吉な鳥の嘎れ声の意味するものを—この古の、薄気味悪く、見苦しく、物凄く、また不吉な鳥の、その嘎れ声は「最早ない」)¹⁶⁾

上の例文からも窺えるように、どうもカラスは英米の文人には不吉な凶鳥のイメージが強く、その評判は極めて悪いが、それは一般庶民の間でも同じようである。『マザー・グース』の童歌、「ハシボソガラス (The Carrion Crow)」を見てみよう。

A carrion crow sat on an oak,
Watching a tailor shape his cloak;
Wife, cried he, bring me my bow,
That I may shoot yon carrion crow.

The tailor shot and missed his mark,
And shot his own sow through the heart;
Wife, bring brandy in a spoon,
For our poor sow is in a swoon.

(からすかんたろ 櫛の木で
仕立屋裁つのを 見てたのに、
女房よ 弓を 持ってこい
あいつあ 射らにゃと どなったわい。

ひょうと放した的が 逸れ
雌豚の 心の臓を 射た。
女房よ 匙で 酒持ってこい

豚のぶったおれだ やーれやれ。) ¹⁷⁾

また、『イソップ寓話集』でも数多くのカラスが登場するが、その描写は押並べて非好意的であり、この鳥は多くの場面で嘲笑の対象となっている。代表的な一例として「カラスと狐」を挙げておきたい。

A crow sat in a tree holding in his beak a piece of meat that he had stolen. A fox which saw him determined to get the meat. It stood under the tree and began to tell the crow what a beautiful big bird he was. He ought to be king of all the birds, the fox said; and he would undoubtedly have been made king, if only he had a voice as well. The crow was so anxious to prove the he had a voice, that he dropped the meat and croaked for all he was worth. Up ran the fox, snapped up the meat, and said to him: 'If you added brains to all your other qualifications, you would make an ideal king.' ¹⁸⁾

(或る鳥が肉を盗んで或る木の上にとまりました。狐が彼を見て、その肉をせしめようと思ったので、立ち止まって、彼を格好がよくて美しいとほめました。その上、鳥どものうちで一番彼が王様にふさわしい、そしてもし彼が声をもっていたら、きっとそうなることだろうけれど、ともほめました。と、鳥は声もまたもっていることを狐に見せてやろうと思って、肉を抛り出して大きな声で啼きました。と、狐は駆け寄って、その肉を盗むと「おお鳥さん、もしお前さんがまた心ももっていたら、お前さんが皆の王様になるのに何一つとして不足なものはないでしょうがね」と言いました。) ¹⁹⁾

『ブルーワーカー故事成語大辞典』は「言葉の合財袋」であり、「成句・故事辞典・人に話して面白そうな熟語や風刺句や言葉などの起源、由来、語源を語る一書」²⁰⁾であるが、この書に於てもカラスは「論争、不和、闘争の象徴」²¹⁾ (crow) であり、「不吉を知らせる鳥。死の前兆となり、病気と不運をもたらすとされる鳥」 (raven) でしかない。具体例を見てみよう。

(1) 「I must pluck a crow with you; I have a crow to pick with you あなたに対して言い分がある、話をつけなければならないことがある、という意味で、不快の意を表す……」²²⁾

(2) 「To crow over one 敗者やおとしめられた者に対して勝ち誇ること。闘鶏で勝利したニワトリがよく時を作る crow ことにことよせた表現。」²³⁾

(3) 「To eat crow 無理やり嫌なことをさせられること。1812年から1814年の英米戦争の停戦中に起こった出来事に由来する表現。その出来事とは次のとおり。一人のニューイングランド住人が狩の最中、知らぬ間に英国側防衛線内に入り込んでカラスを撃ち落とした。ちょうどその射撃の音を聞いた英国軍士官は、たまたま武器を携帯していなかったが、侵入者を処罰してやろうと決めた。そこで、アメリカ人の射撃の腕をほめながらその鉄砲をつかみ、見せてくれと要求した。英国士官は鉄砲を手にとると、銃口を突きつけて、アメリカ人に敵地に侵入した罰として撃ち落としたカラスに食らいつけと命じた。こうして士官が銃を返すと、アメリカ人は今度は士官にねらいを定めて、そのカラスの死骸の残りの部分を無理やり食わせたのである。」²⁴⁾

(2)

ここで、聖書のカラスについて見てみたい。というのも、カラスは聖書で一番最初に登場する鳥であり、しかも、旧約聖書のみならず新約聖書にも登場して重要な脇役を務めているからである。聖書全体の中でカラスについての言及があるのは、以下に示す旧約聖書の10箇所と新約聖書の1箇所である。

(1) Genesis 8:7-11

And he [Noah] sent forth a raven, which went forth to and fro, until the waters were dried up from off the earth. Also he sent forth a dove from him, to see if the waters were abated from off the face of the ground; But the dove found no rest for the sole of her foot, and she returned unto him into the ark, for the waters [were] on the face of the whole earth: then he put forth his hand, and took her, and pulled her in unto him into the ark. And he stayed yet other seven days; and again he sent forth the dove out of the ark; And the dove came in to him in the evening; and, lo, in her mouth [was] an olive leaf plucked off: so Noah knew that the waters were abated from off the earth.²⁵⁾

(四十日を経て後、ノアその箱舟に作りし窓を開きて鴉を放ちけるが、水の地に溷るまで行き来しをれり。彼地 [かれち] の面より水の減少 [ひき] しかを見んとて、また鳩を放ちいだしけるが、鳩その足の裏を止 [とど] むべき処を得ずして、彼に還りて箱舟に至れり。其は水全地の面にありたればなり。彼すなわち其の手を延べて、これを捉え箱舟の中に己の処に引き入れたり。なお又七日待ちて、再び鳩を箱舟より放ちけるが、鳩暮れにおよびて彼に還れり。見よ、その口に橄欖 [オリーブ] の新葉 [わかば] ありき。是 [ここ] に於てノア地より水の減少しを知れり。)²⁶⁾

(2) Leviticus 11:15

(ye shall not eat) Every raven after his kind...

(<是をば食らうべからず。是は忌まわしき者なり。すなわち>.....鴉の類全部.....)

(3) Deuteronomy 14:14

(ye shall not eat) every raven after his kind...

(<是等は食らうべからず>.....鴉の類全部.....)

(4) Kings-1 17:4-6

And it shall be, [that] thou shalt drink of the brook; and I have commanded the ravens to feed thee there. So he went and did according unto the word of the LORD: for he went and dwelt by the brook Cherith, that [is] before Jordan. And the ravens brought him bread and flesh in the morning, and bread and flesh in the evening; and he drank of the brook.

(汝その川の水を飲むべし。我鴉に命じて彼処 [かしこ] にて汝を養わしむと。彼往きてエホバの言葉の如く為せり。即ち、往きてヨルダンの前にあるケリテ川に住めり。彼の処に鴉朝 [あした] にパンと肉、また夕 [ゆうべ] にパンと肉を運べり。彼は川に飲めり。)

(5) Job 38:41

Who provideth for the raven his food? when his young ones cry unto God, they wander for lack of meat.

(鴉の子神に向かいて呼ばわり、食物なくして徘徊 [ゆきめぐ] る時、鴉に餌を与える者は誰ぞや。)

(6) Psalms 147:9

He giveth to the beast his food, and to the young ravens which cry.

(<主は>くいものを獣にあたえ、又なく子鴉にあたえたまう)

(7) Proverbs 30:17

The eye that mocketh at his father, and despiseth to obey his mother, the ravens of the valley shall pick it out, and the young eagles shall eat it.

(おのれの父を嘲り、母に従うことをいやしとする眼は、谷の鴉これを抜きだし、鷲の雛 [こ] これを食らわん。)

(8) Song of Solomon 5:11

His head is as the most fine gold; his locks are bushy, and black as a raven.

(その頭 [かしら] は純金のごとく、その髪の毛はふさやかにして黒きこと烏のごとし。)

(9) Isaiah 34:11

But the cormorant and the bittern shall possess it; the owl also and the raven shall dwell in it: and he shall stretch out upon it the line of confusion, and the stones of emptiness.

(鵜と針鼠とそこを己がものとなし、鷲と鴉とそこにすまん。エホバそのうえに乱 [みだれ] をおこす縄をはり、空虚 [むなしき] をきたらする錘 [おもし] をさげ給うべし。)

(10) Luke 12:24

Consider the ravens: for they neither sow nor reap; which neither have storehouse nor barn; and God feedeth them...

(鴉を思い見よ。播かず、刈らず、納屋も倉もなし。然るに神は之 [これ] を養いたまう。)

最初に、聖書は『創世記』の洪水伝説の物語を通して「烏が由緒正しい生まれ」²⁷⁾であり、義人ノアの聖鳥であることを明確に示している。とはいえ、水が地から引いたことをノアに教えるのは、箱舟に「二度と戻らなかった」²⁸⁾カラスではなく、オリーブの若葉を嘴にくわえて戻って来た鳩である。換言すれば、カラス(黒)は鳩(白)に比べて劣る鳥として描かれているが、クレベールはこの物語に登場する二羽の鳥にはシンボルとしての意味が込められているという。つまり、「烏はまだ晴れやらぬ闇の暗さを表し、白鳩は再び戻ってきた明るさを表している」²⁹⁾のである。次に、聖書はカラスが、フクロウと同様、食してはならない不浄の鳥(『レビ記』11章15節と『申命記』14章14節)であり、しかも、廃墟に住む鳥(『イザヤ書』34章11節)であることを示している。

しかし、聖書の中で多少なりともカラスが否定的に描かれているのはこの4箇所のみであり、全体として見れば、「神から加護を受ける典型的な鳥」³⁰⁾として極めて好意的に描かれている。それ

は次の言葉：(1)「彼の処に鴉朝にパンと肉、また夕にパンと肉を運べり」（『列王紀上』17章6節）、(2)「鴉の子神に向かいて呼ばわり、食物なくして徘徊る時、鴉に餌を与える者は誰ぞや」（『ヨブ記』38章41節）、(3)「くいものを獣に与え、又なく子鴉に与え給う」（『詩篇』147篇9節）、(4)「鴉を思い見よ。播かず、刈らず、納屋も倉もなし。然るに神は之を養いたまう」（『ルカ伝』12章24節）を見れば一目瞭然である。また、『マタイ伝』に於ける「天の鳥たち（“birds of heaven”）」とはカラスのことである。³¹⁾

ちなみに、「鴉の子神に向かいて呼ばわり、食物なくして徘徊る時、鴉に餌を与える者は誰ぞや」という聖書の言葉の背景には「古来、カラスは雛がかえると、その体が白いのを忌みきらって巣をあとにし、雛が黒い羽でおおわれるまで戻って来ないという俗説」³²⁾が秘められているらしいが、どうもワタリガラスは子煩悩の鳥ではないようだ。というのも、ハドソンは「成長した子供を追い払おうとする鳥」の例としてロビンとワタリガラスを挙げ、後者について「母鳥もまた父鳥におとらず子を憎み、二羽が協力して代わる代わる痛めつけ、一羽ずつ殺してゆく。勝つのはいつも親である」³³⁾と述べているからである。

さて、カラスが一般庶民の間で如何に「不吉な鳥」と見なされようと、聖書の世界では凶鳥というよりも「神から加護を受ける典型的な鳥」であることに誰も異論はなかりう。では次に、ヘブライズム以外の異教の世界で「聖鳥」として扱われてきたカラスについて見てみよう。

(3)

先ず最初に、フリースの『イメージ・シンボル事典』によれば、「北欧神話では、Hugin（知能）とMunin（記憶）の二羽の大鴉はオーディンの遣わす問者で、世界の出来事のすべてを彼に告げる。アポロのカラス、ノアの大鴉を参照」³⁴⁾とある。しかし、『創世記』の洪水伝説の物語で既に見たように、この鳥は問者としては失格である。アポロン（太陽神はローマ神話ではアポロ、ギリシア神話ではアポロンと呼ばれる）の聖鳥であったカラスとて例外ではない。

いなそれどころか、問者としての失敗に、この鳥の一大変身が秘められている。というのも、オウィディウスの『変身物語』によると、「この鳥は、むかしは、雪白の翼を銀のように輝かせていて、一点のけがれもない鳩たちにも比肩した。のちに、カピトリウム丘を救うことになるはずの鷲鳥たちや、水流を好む白鳥にも、その白さを譲りはしなかった」³⁵⁾のであるが、「おしゃべりな舌」、換言すれば、問者としての失敗が原因で、白い鳥から黒い鳥へと変えられてしまったからである。

その失敗とは、アポロンの熱愛する乙女コロニスの不貞を知ったカラスが——身の破滅を招く告げ口はしないようにと彼を諫める小鳥の必死の努力にもかかわらず——報償を目当てに敢えて主人の太陽神に報告したことにある。カラスの密告を聞くやいなや、憤激したアポロンは非情にも弓矢で愛人のコロニスを殺したが、後に深く後悔し、「この悲しみの因を無理に告げた鳥を憎み」、「忠実な報告の褒美をあてにしていた鳥を、白い鳥たちの仲間から追放してしまった」³⁶⁾のである。カラス（crow）について、フリースは「饒舌であるところから、神託者、使者、告げ口屋、占いを表すが、いずれの場合も不吉な内容であることが多い」³⁷⁾と指摘している。

とはいえ、古代ギリシアの世界でカラスが太陽神アポロンの聖鳥に選ばれたのは、その黒い羽根の色と深い関係があるのではなかりうか。この点を含め、太陽と深く係わる聖鳥カラスについて、荒俣宏は『世界大博物図鑑（鳥類）』の中で、次のような実に興味深い指摘をしている。

またその黒色は太陽に近づきすぎて焦げたためとか太陽黒点を象徴するとかいわれて、太陽の使いの鳥ともみなされた。太陽神アポロンが怪物テュボンから逃げるときにカラスに変身したというギリシア神話や、3本足（太陽黒点の数）の神聖なカラスに関する

伝説は、すべてここに起源をもつ。黒い鳥であるにもかかわらず、ふつうカラスは昼間の象徴である。³⁸⁾

この説明を見れば、カラスがアポロンの聖鳥となったのは無理なく納得できるが、何よりも私をいたく驚かせたのは「3本足(太陽黒点の数)の神聖なカラスに関する伝説は、すべてここに起源をもつ」という指摘である。というのも、紀州の出である私は熊野神社ではカラスが神の使いであることを知ってはいたが、しかし、何故にこの聖鳥の足が三本も描かれているのか分からなかったからである。カラスと太陽に関する神話の東洋版について、唐沢孝一は「中国では古くから太陽には三本足のカラスがいると信じられてきた。太陽の黒点を三本足のカラスに見立てたものである」³⁹⁾と述べている。

と見てくれば、カラスが「神から加護を受ける典型的な鳥」であり、ノア、エリア、アポロン、オーディンなどに代表される「あらゆる光明の英雄たち」⁴⁰⁾の聖鳥であることは確かである。とはいえ、洋の東西を問わず、一般庶民の間で、カラスと言えば、圧倒的に「不吉な鳥」のイメージが強いのではなからうか。そして、カラスが太陽と結びつく聖鳥と見なされる要因が全身漆黒の羽根の色にあるとするなら、この鳥が凶鳥と見なされてきた大きな一因は、その鳴き声にあると言えるよう。

事実、研究社の『英語歳時記』は「しわがれた鳴き声にはいろいろ不吉な連想がまつわっている」⁴¹⁾と述べている。というのも、カラスの鳴き声が人間の声音に似ているからであるが、鳥の鳴き声と人間の迷信について、ハドソンは次のように述べている。

Human-like voices are found among the auks, loons, and grebes; eagles and falcons; cuckoos, pigeons, goatsuckers, owls, crows, rails, ducks, waders, and among these, particularly when heard in the dark hours, in deep woods and marshes and other solitary places, profoundly impress and even startle the mind, and have given rise all the world over to numberless superstitious beliefs. Such sounds are supposed to proceed from the devils, or from demons inhabiting woods and waters and all desert places; from night-wandering witches; spirits sent to prophesy death or disaster; ghosts of dead men and women wandering by night about the world in search of a way out of it; and sometimes human beings who, burdened with dreadful crimes or irremediable griefs, have been changed into birds. The three British species best known on account of their supernatural character have very remarkable voices with a human sound in them; the raven with his angry, baking cry, and deep, solemn croak; the booming bittern; and the white or church owl, with his funeral screech.⁴²⁾

(人間に似た声は、ウミガラス、アビ、カイツブリの間に、また、ワシ、タカ、カッコウ、ハト、ヨタカの類、フクロウ、カラス、クイナ、カモ、しょうきん類とじゅんけい類の鳥たちの間にも存在する。これらの中のある鳥のきゃっという叫びや笑いの声は、特に日が暮れてから、深い森や沼地や、その他の寂しい場所で聞くと、人の心に深刻な印象を与え、おびやかさしさえする。そして世界中にわたって、無数の迷信性のある信仰を生んできている。そういう音は、悪魔から、森や川や、すべて寂しいところに住みついている魔神から出てくるものと考えられている。夜をさまよう魔女たちから、死とか災害を予言するために送られる神霊たち、死後出口をさがして夜間世界をさまよってきている亡霊たち、時には、恐るべき犯罪や、癒し難い苦悩を背負って、鳥の姿に変わった人

間たちからも出るものと思われている。その超自然的な性格のためによく知られているイギリスの鳥三種は、一種人間の口調を含む非常にきわ立った声を持っているが、例の怒ってほえるような叫び声を持ち、底ごもっていかめしく、かあかあという声で鳴くオオガラス、ぶんぶんという鳴き声を出すサンカノゴイと、葬送の時のようなぎゃあぎゃあという声をしているシロフクロウ、またの名をキョウカイフクロウ。) ⁴³⁾

以上ワタリガラスを中心にカラスについて色々見てきたが、「19世紀初頭までは（英国の）全国いたるところにいたワタリガラスは、その後内陸部からほとんど掃蕩されて、今では卵が比較的安全にまもられる一部の海岸の断崖とか、内陸部の奥地などでないと見られなくなった」⁴⁴⁾とハドソンは嘆いている。聖書の影響もこの鳥には無縁のようである。『セルボーン博物誌』にはギルバート・ホワイトの故郷にいた「最後のワタリガラス」に纏わる哀話 ⁴⁵⁾があるが、この鳥を縁起の悪い「害鳥」と認定し、殺せる限り殺したのは万物の霊長と言われる得手勝手な人間であることを忘れてはなるまい。

最後に、『鳥たちをめぐる冒険』の中から、少年に恋をしたコクマルガラスの微笑ましい話を紹介して、この章を終えたい。

This is the case of a jackdaw which was found last year, unable to fly, and taken home by a boy in the village of Tilshead in the South Wiltshire downs. In a very few days the bird recovered from his weakness and was perfectly well and able to fly again, but he did not go away; and the reason of his remaining appeared to be not that he had been well treated, but because he had formed an extraordinary attachment, not, as one would naturally suppose, to the boy who had rescued and fed him but to another, smaller boy, who lived in the next cottage! It was quite unmistakable; the bird, free to go away if he liked, began to spend his time hanging about the cottage of his chosen little friend. He wanted to be always with him, and when the children went to school in the morning the daw would accompany them, and flying into the schoolroom after them settle himself on a perch where he would sit until the release came. But the proceedings were always too long for his patience, and from time to time he would emit a loud caw of remonstrance, which would set the children tittering, and eventually he was turned out and the door shut against him. He then took to sitting on the roof until school was over, whereupon he would fly down to the shoulder of his little friend and go home with him. In the same way he would follow his friend to church on Sunday morning, but even there he could not repress his loud startling caw, which made the congregation smile and cast up its eyes at the roof. My friend the vicar, who by-the-by is a lover of birds, could not tolerate this, and the result was that the daw had to be caught and confined every day during school and church hours. ⁴⁶⁾

（去年サウス・ウィルトンシャーの草丘のテイルズヘッド村に住むある少年が、飛べないでいるコクマルガラスを家に持ち帰った。鳥は3、4日で元気をとり戻し、元どおり空も飛べるようになったが、一向に飛び去らなかつた。そして鳥がいつまでもそこにいたがったのは、手あつい介抱のためではなく、ひとかたならぬ恋のためらしかった。当然、彼の相手は彼を助け餌をやった少年だろうと思われるところだが、実はなんと隣家に住む小さな男の子だったのだ！ 誤解の余地はなかつた。そうしたければいつでも飛び去

れるはずのこの鳥は、自分の選んだ、小さな友だちの家の近辺にいつくようになった。いつでも少年のそばにいたり、学校に行くときもついていって教室に入り、一つ所にとまって授業が終るのを待った。だが彼の忍耐心にとって、学校の授業の教程は長すぎた。コクマルガラスはしばしば大声で不服を訴え、子供たちはクスクス笑った。結局彼は外へ出され、ぴしゃりとドアをしめられた。すると今度は屋根の上にとまって放課後を待ち、時間になるとおりてきて少年の肩にのり、一緒に家に帰った。日曜日には教会にもついていった。だがここでも彼がけたたましい声でカアとやるのをとめることはできなかった。会衆はくちもとをほころばせて天井を見上げた。教区牧師は私の友人で、ついでながら愛鳥家でもあったが、これをゆるすわけにはいかなかった。そこでとうとう、このコクマルガラスは、毎日学校の授業時間と教会のあいだは、閉じ込められることになったのである。) ⁴⁷⁾

注

- 1) 『朝日=ラルース 世界動物百科 (鳥類)』(朝日新聞社、昭和47年)、第81号、p. 1.
- 2) アド・フリース、『イメージ・シンボル事典』、山下主一郎主幹、荒このみ・上坪正徳・川口絃明・喜多尾道冬・栗山啓一・竹中昌宏・深沢俊・福士久夫・山下主一郎・湯原剛訳 (大修館書店、1984)、p. 153.
- 3) 『イソップ寓話集』、山本光雄訳 (岩波文庫、1991)、p. 135.
- 4) E. C ブルーワー、『ブルーワー英語故事成語大辞典』、加島祥造主幹、鮎沢乗光編集、鮎沢乗光・伊藤泰雄・岡田岑雄・小澤喬・内藤純郎・並木慎一・水脇準・宮本三恵子・吉田尚子訳 (大修館書店、1989)、pp. 1443.
- 5) *Op. cit.*
- 6) 水之江有一編著、『絵で見るシンボル辞典』(研究社、1986)、p. 29.
- 7) W. H. ハドソン、『鳥たちをめぐる冒険』、黒田晶子訳 (講談社、昭和52年)、pp. 261-262.
- 8) 『朝日=ラルース 世界動物百科 (鳥類)』、第82号、pp. 13-15.
- 9) ジャン=ポール・クレベール、『動物シンボル事典』、竹内信夫・柳谷巖・西村哲一・瀬戸直彦/アラン・ロシェ訳 (大修館書店、1971)、p. 111.
- 10) 實吉達郎、『動物故事物語 (下)』(河出文庫、昭和63年)、p. 103.
- 11) *Othello* (IV, 1) in *The Complete Works of William Shakespeare: His Plays and Poetry*, (Creative Multimedia Corporation, 1992).
- 12) シェイクスピア、『オセロー』、福田恒存訳 (新潮文庫、昭和52年)、p. 117.
- 13) *Macbeth* (I, 5) in *The Complete Works of William Shakespeare: His Plays and Poetry*, (Creative Multimedia Corporation, 1992).
- 14) 『シェイクスピア全集』、『マクベス』、小田島雄志訳 (白水社、1984)、p. 33.
- 15) *The Complete Works of Edgar Allan Poe*, vol. VII (*The Poems of Edgar Allan Poe*), edited by Charles W. Kent (New York: Ams Press, 1965), p. 98.
- 16) 『ボオ詩と試論』、『鴉』、福永武彦訳 (創元推理文庫、1985)、p. 158.
- 17) 吉竹迪夫、『まごい・ぐーす [解説と訳詞] (下巻)』、(中教出版、昭和57年)、p. 714.
- 18) *Fables of Aesop* (Penguin Classics, 1975), p. 12.
- 19) 『イソップ寓話集』、山本光雄訳、pp. 132-133.
- 20) E. C ブルーワー、i.
- 21) *Ibid.*, p. 438.
- 22) *Ibid.*, p. 439.
- 23) *Op. cit.*
- 24) *Op. cit.*

- 25) 本稿に於ける聖書の引用は『欽定訳聖書 (The Holy Bible, Authorized King James Version)』による。
- 26) 和訳は『旧新約聖書 文語訳』（日本聖書協会、1982年）から参考までに引用したものであるが、一部の読み難い漢字と平仮名を現代風に改めていることをお断りしておきたい。
- 27) ジャン＝ポール・クレベール、p. 111.
- 28) フリース、p. 518.
- 29) ジャン＝ポール・クレベール、p. 111.
- 30) ピーター・ミルワード、『英文学のための動物植物事典』、中山理訳（大修館書店、1990）、p. 232.
- 31) フリース、p. 520.
- 32) 荒俣宏、『世界大博物図鑑』、第4巻 [鳥類]（平凡社、1987）、p. 385.
- 33) W. H. ハドソン、『鳥たちをめぐる冒険』、p. 264.
- 34) フリース、p. 519.
- 35) オウイディウス、『変身物語（上）』、中村善也訳（岩波文庫、1981）p. 77.
- 36) オウイディウス、『転身物語』、田中秀央・前田敬作訳（人文書院、昭和51年）、p. 612.
- 37) フリース、p. 153.
- 38) 荒俣宏、p. 384.
- 39) 唐沢孝一、『カラスはどれほど賢いか 都市鳥の適応戦略』（中公新書、昭和63年）、p. 219.
- 40) フリース、p. 519.
- 41) 『英語歳時記（冬）』、土居光知・福原麟太郎・山本健吉監修、成田成寿編集、佐山栄太郎執筆（研究社、1970）、p. 169.
- 42) W. H. Hudson, *Birds and Man* (New York: Alfred A. Knopf, 1929), pp. 112-113.
- 43) W. H. ハドソン、『鳥と人間』、小林歳雄訳（講談社、昭和53年）、pp. 127-128..
- 44) W. H. ハドソン、『鳥たちをめぐる冒険』、p. 262.
- 45) ギルバート・ホワイト、『セルボーンの博物誌』、山内義雄訳（講談社学術文庫、1992）、pp. 24-28.
- 46) W. H. Hudson, *Adventures among Birds* (London: Dent & Sons, 1951), pp. 71-72.
- 47) W. H. ハドソン、『鳥たちをめぐる冒険』、pp. 90-91.

平成8(1996)年9月12日受理

平成8(1996)年12月25日発行

